

2018年
12月11日
火曜日

●退任教授最終チャペル講話／藤井 和夫 教授（外国経済史）

学生時代—チャペルと妄想

この春に、関西学院大学を退職します。教員として経済学部で三十八年間勤務しました。自分自身が同じ学部と大学院研究科を卒業しているので、ここには四十七年間ほど通ってきたことになりました。その間、大学には学部が増え、キャンパス内の建物もずいぶん建て替えられました。が、幸い経済学部は、場所も建物も変わっていないので、こうして古びたチャペルに立っていると、つい昔の学生時代を思い出してしまいます。

私は父がクリスマスチャンだった関係で、子どもの頃に教会の日曜学校に通っていたことがあります。記憶にある教会は、明るい場所です。いつも人がたくさんいました。ところが関西学院大学に入学してみると、そのチャペルは、入学直後のオリエンテーションの時期以外は、人も少なく、暗くて静かな場所でした。外部からは遮断され、冷房のない時代の夏の昼間でも比較的ひんやりしていて、寝るのにちょうどいい場所だなど思った記憶があります。

でも暗く、静かで涼しい場所であるにもかかわらず、チャペルでは眠れません。部屋が階段教室のようになっていて、座席に着くために人が移動するたびに床がギシギシ音を立てるため、椅子が固い木でできていて背もたれがほぼ垂直になっただけでも、眠れない理由は、チャペルだから当然のことなのです。

が、そこではいつも誰かがマイクに向かって話しているからです。ほそほそした声でも、誰かが聴衆の一人である自分に向かって話しかけてくると、私は眠れません。では熱心にチャペルでの講話に聞き入っていたのかというと、そんな記憶もあまりないのです。今振り返ると、不思議な体験をしていたことを思い出します。

私にとって学部のチャペルというのは、人の話を聴きながら、知らぬ間に、自分の考えていることを展開し反芻する、というより正確には、個人的な妄想に耽る場所になっていたのです。つまり、人の話を好きなように自分勝手に聞いている、はじめは話に引き込まれていても、いつの間にかそこから自分の考えていたことに話は繋がって行って、気づけば自分が普段考えていることをここでも頭の中でいじくり回している、そんな記憶が残っています。

そもそも大学生になって何よりもうれしかったのは、自分で考える対象を選べたことと、自分の好きなように勝手に考えてもよくなったことでした。すべてにわたって、このことについて考えよとか、こういう風に考えなさい、といわれることはほとんどなくなり、聞き方も自由、聞く話の選び方も自由。つまり、聞かなければならない話ではなく、自分で聴きたい話を聴けばいい。さらに、勝手に考えて、こうなんだと、自分で決めつけても、別に構わな

い。それは快感です。そんな「自分勝手」に目覚めたら、大学生活はとても楽しい。そんな風に感じてうれしくてたまりませんでした。

ただ、無意識に同意を求めて、自分の考えを他人に向かって話す時には、自分の勝手な考え方は、いつもそれでいいとか別に構わない、とはなりません。自分の考えを他人に理解してもらおう、相手に同意してもらおう、これはなかなか難しいものです。自分の考えそのものを、相手がかかるように、相手が同意するように変えていかなければならぬ。相手が理解しやすい話し方をしなければならない。相手が考えていることについても、相手が考えるようにこちらも考えていかなければならない。こんなことは当たり前のことなのですが、人と行う議論や会話の意味は、こうして自分の考えを洗練させ、相手の考えとのやりとりを通してより良いものに変えていく、あるいは共通の理解を他人と共有できるようになることでしょう。当時は、これがちよつと苦手でした。学生さんにディベートを推奨しながら

こんなことを白状するのは何ですが、人との会話は、いつも楽しいとは限りません。面倒くさいな、億劫だな、と感じた記憶が残っています。

チャペルでの体験は、それとは全く異なるものでした。話し手は自分に向かって話してくれているのです。聞いていてこちらは、相手の話をきつかけにあらぬ方向に自分の考えが拡がっていったら、いつの間にか勝手に自分自身の考えに耽っている、妄想を好きなように膨らませているのです。学生時代はチャペルの熱心な参加者ではありませんでしたが、そんな意味でチャペルが気に入っていました。講師の人たちには本当に申し訳ない話なのですが、ひどく「自分勝手」な聴き手として、経済学部でチャペルが好きでした。もちろんその際、その「自分勝手」が、話し手の話をきつかけにして実現する、ということは当時も感じていました。チャペルの時間は、自分が自由になるきつかけを与えてくれる、そう思いました。このチャペルは、そんな自由を許してくれる。そう信じています。

ただ、大学には講義や授業があります。これは勝手に違つて少し難儀です。何よりも、決められた内容を聞かなければならない。聞いて、理解して、記憶して、試験の間に答えなければならぬ。話し手によって、こちらは聞かせる意識も薄いまま、好き勝手なことを好きなように話すだけの人もいれば、このことについてはこう考えるべきで、当然こういう結論になる、と考え方を押しつけてくる人もいます。たまに、引き込まれるおもしろい話に出会って、話の流れに自分の考えも同調するのを感じられるような講義もありましたが、総じて人の話を聞きながら好き勝手に考えをめぐらしたい人間には、授業の「良き聴き手」になるのは至難の業でした。与えられる内容を素直に聞き取りながら自分の好きなように解釈するという能力もなかつたので、相性のいい偏つた話し手を選びたがる不熱心な学生に過ぎませんでした。

そんな私が教師になり、長い時間を母校で過ごしながら今になってつくづく反省していることがあります。それは、自分の授業の中で、この話を聞きなさい、これを理解しなさい、と言いつ過ぎたことです。一個の自分を全世界に対峙させて、いきなり突っかかってくるような思い上がった私の学生時代とは異なつて、今の若者は、身近な周りをよく見ていて、周りの声をよく聞いています。柔軟で素直で敏感な感性を持ち合わせています。だから彼らには、むしろ、人の話を聞きながら自分の勝手な妄想を膨らませよう、と呼びかけるべきでした。人の話は単なるきつかけにしておいて、自分自身の勝手なテーマ、勝手な解釈、それをもっと追求しよう、そう言うべきだったと思うのです。自分の考えなんか、小さなつまらぬものかもしれませんが、それが社会、世界、人生を知る一歩になるといふ以上に、そういう小さなものとしてこそ、大きな世界がわかってくる、そういう体験を学生時代にして欲しいのです。思えば、私のこのチャペルでの妄想が行き着いたのも、そんなことだったように思います。